

## 談話室

## 20 世紀ナシと覚之助おじいさん

いし 井 賢 二

平成 12 年 9 月 3 日、JR 松戸駅西口デッキで鳥取県主催「20 世紀梨のお里帰り」のイベントが開かれ、鳥取産の 20 世紀ナシ 2,000 個を訪れた人にプレゼントしたり、皮剥き競争やナシのシャーベット早食いなどが催されて鳥取と松戸の交流を深めた。知事も来られた。また 13 年 4 月 2 日鳥取・倉吉市に「鳥取 20 世紀梨記念館」がオープンし、「松戸覚之助氏感謝碑」の除幕式が行われ、市長ら関係者 92 人が参加した。

20 世紀ナシが松戸に里帰り聞いて怪訝な顔をした人が多かった。20 世紀ナシといえば鳥取と思っている人が多いからで、それがなぜ里帰りかと思っても無理もない。松戸で 20 世紀ナシを栽培する人はなく千葉県でも栽培は減った。20 世紀ナシよりも甘い新水、幸水、豊水（総称して 3 水という）が店頭を圧倒しているし、20 世紀ナシは値段が高いので買う人は多くない。若い層は 20 世紀の名は知っていても食べたことがなく、松戸原産と知る人はわずかだ。私は 20 世紀ナシに縁のある一人であるが時代の趨勢で仕方ないと思っている。

## I 20 世紀ナシ出生の謎

20 世紀ナシを見つけたのは松戸市（旧八柱村）大橋・松戸覚之助であることは多くの文献にあるが、ここでは市井に紹介されていない部分を述べる。

覚之助が発見したという苗は、石井佐平の家の庭先にあった〈ごみ溜め〉といわれる落葉や野菜屑を掃き溜めておく場所に、実生苗が 2 本生えていたという。覚之助は「これ、貰っていくよ」と引き抜き自園に植えたのが始まりである。このごみ溜めはこんもりとした形で私もよく乗って遊んだ。

佐平の家は私の祖父喜平治の実家で、喜平治は弟佐平に家督を譲って新しく家を興した。喜平治の長男喜一は私の父だ。佐平の家は大きな構えで庭先には深い釣瓶井戸があった。今もある。

覚之助は佐平の庭から引き抜いた苗を覚之助の父伊左衛門の興したナシ園に植えたというが、自宅の奥庭に植

えて毎日観察したとも聞く。覚之助が目をつけた苗はほかの赤ナシとは違ったところがあり、歩いて 25 分ほどかかる自園に植えるよりも、いつでも見られる屋敷の庭の方が自然の理だ。

ナシは実生から 3 年後には結実するが、覚之助が移植した苗はなかなか結実せず、結実しても黒斑病に懼り満足なものはできなかったが、明治 31（1899）年に初めて予期したような実が得られた。

覚之助が佐平の掃き溜めから実生苗を買っていったのは 13 才のことだ。明治 21（1888）年に当たる。伊左衛門没後覚之助はナシ園を継ぎ、屋敷の長屋門には分厚い縦形の大きな木札に「錦果園」と墨書して吊り下げた。

20 世紀と命名されたのは明治 37（1904）年のことであるが、それまでは天慶とか新大白と呼ばれていた。当時は日露戦争の勝利で湧いていたこともあって、凱旋と名付けて苗を販売する業者がいて、明治 43（1910）年第 4 回園芸大会で恩田鐵弥は「20 世紀を凱旋などと称するのは困る」と言った。20 世紀ナシ苗が初めて広告に載ったのは興農雑誌 1 月号（明治 38 年）で、苗の値段が 1 本 15 銭、赤ナシの長十郎は 4 銭であった。

20 世紀という名前は当時の世相にマッチし、爆発的人気を博して各地に広まっていった。



Remembrance on the Japanese Pear "Nijusseiki" and Breeder Mr. Kakunosuke Matsudo. By Kenji Isii

(キーワード：黒斑病、袋掛け、天然記念物、ポルドー液)